

〔論 説〕

「ニューノーマル」時代の外国語語教育

—授業・学習の「サイクル」をめぐって—

山内 真理

1. はじめに

本稿執筆中、2021年1月7日に再び緊急事態宣言が出され、新型コロナウイルス感染症がどうなるのか、先が読めない状況が続いている。100%「対面」の授業が可能になったとしても、授業のやり方が以前の「常態」に戻ることはないだろう。突然遠隔授業に対応することが求められた2020年度の春学期を経て、これからはしばらくの間は、授業方式の切り替えに対応することが必要になっている。

本稿では、100%「遠隔」環境を想定した授業設計が、他の授業方式にも適用できるかどうかとも検討しながら(3節)、2020年度秋学期開講の「基礎英語2」の実践を振り返る。まず、指導・学習の目標と、それを達成するために設計したメインの学習活動および教員の介入(指導・支援)を連動させる「学習サイクル」を概観する(2節)。この授業・学習サイクルを構成する個々のオンラインでの学習活動について詳述し(4節)、そのサイクルで重要な役割をはたす「振り返り」について、学習者・教員双方の観点から論じる。最後にプラットフォームとしてのTeams利用(6節)も概観する。

2. 学習のサイクルと学習モード

本稿で考察対象とするのは、2020年度秋学期開講の「基礎英語2」である⁽¹⁾。この授業については、2020年度春学期の経験を踏まえ、授業中の学習と授業外の自習が「学習のサイクル」を作るよう、時間配分や学習モード(双方向性・同期性・個人か一斉かなど)も考えて、全体設計を行なった。

2.1 到達目標・指導目標と学習活動

この授業では、「英語の音声処理・コミュニケーションのスキルと態度・外国語の学び方」の3つの側面で到達目標を設定している(表1)。

このような到達目標・指導目標を設定したのは、筆者がこれまで見てきた学生は、この3点が共通して弱いからである。耳と口を使って行う初歩的な練習を経験しておらず、英語音声の基本的な特徴に習熟していない。英語でのインタラクションの経験も乏しい。そもそも、単語や例文を音声を確認せずに覚えてきた者も多い。当然「文字を見たら分かる」

(1) 2019年度に新設された全学部対象の英語科目の一つである。同科目の2019年度秋学期および2020年度春学期の実践報告は、それぞれ山内(2020a)、山内(2020b)を参照されたい。

表1 「基礎英語2」の到達目標・指導目標

到達目標 (学生向け)	指導目標 (教員向け)
1. 言語は音声抜きでは学べないことを自覚し、音声面を強化する。	音声英語の知覚／産出の基礎訓練を通して、Connected Speechの基本を理解し、音声知覚を向上させる。
2. 特に初対面の人と、英語でコミュニケーションができるスキルと態度を身につける。	インタラクションにおける英語使用に慣れ、英語でのコミュニケーション力を向上させる。
3. 外国語の学び方を身につける。	授業期間終了後も自立的に学習を継続できる力を身につける。

フレーズでも聞いたら理解できず、口からも出てこない状態であり、英会話に対する不安も高い (山内, 2020a; 2019; 2017)。また、この科目では習熟度別クラス編成が行われないため、受講生は、語彙・文法の知識面では差があることが予想される。そこで、共通のニーズを想定できる上記3点を授業の到達目標とした。この目標に向けた主な学習活動は以下の通りである。

- A. VOA Let's Learn English Level 1 (会話主体の動画教材) : 自動採点フィードバック付きクイズで予習・自習 (目標1 + 目標3)
- B. 洋楽; ワークシート (リズム・音声変化の学習) で一斉リスニング (目標1)
- C. 会話練習・パターン練習: ペア/グループワーク (目標2)
- D. Duolingo (語彙文法の基礎固め; 音声付き・発音練習付き) : 自動採点フィードバック付き学習プログラムで自習 (目標3 + 目標1)
- E. 振り返り: 学習の振り返りをフォームで提出 (目標3)

これら授業内外の学習が「学習のサイクル」を作るよう全体設計を行ったのだが、その設計を検討する前に、2020年度秋学期の実際の受講生にとって、メイン教材であるVOAのLevel 1の動画の難易度が適切であったかを見ておく。「VOAクイズ1」は、Let's Learn English, Level 1のイントロダクション, Lesson 1, Lesson 2の3つの動画を利用した。一般的な会話が160wpm程度だとすると⁽²⁾、「イントロダクション」とLesson 2はかなりゆっくり目、Lesson 1はややゆっくり目と言える。

VOA Let's Learn EnglishのLevel 1のレッスンは、表2のスク립トからも分かるように、非常に基礎的なところから始まる。またスピードがゆっくりであることと、動画に字幕がついていることから「簡単すぎる」と思う人がいるかもしれないと考えた。この点を確認するため、初回のクイズの最後に「今回の動画はどうでしたか? 簡単すぎましたか? 初めて会った人に簡単な自己紹介はできそうですか」という質問を加えた(4.1も参

(2) 実用英語技能検定2級のリスニング問題は140wpm前後、センター試験のリスニングの場合、全セクションの平均は160wpm前後である(小森, 2010; 大木, 2012)。2010~2013年のCNNニュースクリップ6本(任意)における米国のアナウンサーの発話量は平均156wpmであった(Ishikawa, 2015; 石川, 2016)。早口の人には200wpm程度の速度にもなるが、Tauroza and Allison(1990)によれば、対話ではなくモノローグ形式での最も速い速度である。

表2 「VOA クイズ1」で利用したVOA 動画

イントロダクション	Lesson 1	Lesson 3
<p>Hello, my name is Anna Matteo. I am from a small town. It is nice but there's no good job for me. Good-bye small town and ... Hello Washington DC. I want to learn about Washington. You want to learn English. Let's learn together. Let's learn English.</p>	<p>Pete: Hi! Are you Anna? Anna: Yes! Hi there! Are you Pete? Pete: I am Pete. Anna: Nice to meet you. Anna: Let's try that again. I'm Anna. Nice to meet you. Pete: I'm Pete. "Anna" Is that A-N-A? Anna: No. A-N-N-A Pete: Well, Anna with two "n's" ... Welcome to ... 1400 Irving Street! Anna: My new apartment! Yes!</p>	<p>Jonathan: Hey, Pete! Who's your friend? Pete: She is Anna. She is new to D.C. Jonathan: Where are you from? Anna: I am from a small town. Jonathan: Well, welcome to D.C. Anna: Thank you. Jonathan: I am Jonathan. I am in apartment B4. Anna: I am in apartment C 2. Marsha is my roommate. Jonathan: I know Marsha. She is nice. Pete: And I am in Apartment D7. I have to go now. Anna: Oh! Pete: Remember to call Marsha at work. Tell her you're here. Anna: Right, thanks, Pete. Nice to meet you! Jonathan: You too, Bye. Anna: Apartment C2, here I come!</p>
46 語 / 30 秒 / 92wpm	49 語 / 20 秒 / 147wpm ※動画全体はオープニング・Speaking Practice を含めて5分	91 語 / 48 秒 / 114wpm ※動画全体はオープニング・Speaking Practice を含めて5分

照)。結果として「簡単すぎた」という声はなく、逆に「少し難しかった。動画を止めながらなんとかできる程度でした」「久しぶりに英語に触れたので少し難しかったです」と、動画自体を「少し難しい」と感じた学生も2名いた。「普通」「復習になった」「面白かった」という漠然とした発言を除くと、「動画はちょうどよく、自己紹介も簡単なものならできそう」という反応（9件：(1)～(9)）か「動画は理解できたが、会話や今後が心配」という反応（5件：(10)～(14)）に大別でき、授業計画に大きな調整は必要ないことが確認できた。

- (1) 簡単でした。軽く自己紹介ならできそうです！
- (2) 会話がゆっくりで、なおかつ内容が簡単なので非常に聞き取りやすくリスニングの練習になった。
- (3) 分かりやすく実践できそうでした。
- (4) 英語は物凄く得意ではないが大学に入って初めて英語を学びとてもたのしかったです！これからの授業が楽しみです！！
- (5) ちょうどよいぐらいのレベルだと感じた。自己紹介は簡潔な簡単なものならできる。
- (6) 高校卒業して久しぶりに英語に触れたので難易度は良かったです。簡単な自己紹介しかできそうにないですが頑張りたいと思います。
- (7) 比較的聞き取りやすかったです。実際に話すときでもこのような英文がすぐに出てくるように英語に慣れていきたいです。
- (8) 私自身とても英語が苦手なことでチャレンジで科目選択をしました。これくらいであ

れば頑張っていけそうです。自己紹介は突然でなければ出来ると思います。

- (9) 何回か聞きながらおしながら回答しました。難しくはなかったです。簡単な自己紹介ならできそうです！
- (10) 内容的には簡単だったが、今まで英語を読んだりすることは多くても、英語で発言し会話する機会は非常に少なかったので、講義をしっかりと受けられるかが心配です。
- (11) スムーズに自己紹介をできるか心配ですが、内容はしっかり理解できたので練習していきたいと思います。
- (12) 簡単すぎでは無かったです。これが1回目って考えると最後の授業はもっと難しいのかなと焦ってます。(略) 不安しかないのですが秋学期よろしくお願ひします。
- (13) 動画はわかりやすかったです。
- (14) 自己紹介は難しそう。

2.2 学習のサイクル

上記のような習熟度の学生を対象として想定し(妥当な想定であった)、上記A～Eの授業内外の学習が「学習のサイクル」を作るよう、授業内外の時間配分と学習モード(双方向性・同期性・個人か一斉かなど)を考えて、全体設計を行なった。全ての判断を意識的に行なったわけではないが、それも含めて言語化してみる。

まず、対話相手とのインタラクション(目標2;活動C)はリアルタイムの双方向性が必要であり、授業時の枠内で行うのがベストである。

日本人にとっての英語音声のポイント(目標1;活動B)は、教員による明示的な指導・解説が必要である。対面時なら「聞く・解答(学生)→解説・発音デモ(教員)→リピート(学生)」の3ステップを一斉に行う。遠隔時は学生の一斉リピートはできず、それ以外では双方向性は必須ではない。個人ごとに行うオンデマンド教材の形も可能だが、今回は、リアルタイムでこの3ステップをカバーし、教員による解説・発音デモは録画しオンデマンド教材としても残すことにした。

各自のペースで、各自必要なだけやってほしいのが、耳慣らし・口慣らしと語彙文法の基礎がためであり(目標1, 目標3)、これは対面でも遠隔でも変わらない。特に語彙・文法については中高での既習であり、どれだけ身につけているのか、知識面での個人差が大きいため、対面授業時でも、各自のレベルで行えるオンデマンド教材での自習(活動D)が向いている。

耳慣らし・口慣らしについては、学生全体に共通する強化ポイントでもあることから(目標1)、共通のオンデマンド教材での自習(活動A)を予習として課し、そこで「言えるように練習」したフレーズを授業時のインタラクションの中で使ってみる(目標2;活動C)、という流れにした。対面授業時は市販のテキスト⁽³⁾をメイン教材として同様の流れで行っていたが、共通のオンデマンド教材が用意できているなら、学習サイクルに自習を

(3) 当該授業のために選んだテキストは付属の音声ダウンロードでき、Audiobookというアプリを経由して反復学習に使えるものである。オンライン教材化はしていない。

組み込むには、採点とフィードバックが即行われる教材の方が効果的である。

目標3に関しては、英語学習や英語使用について、教員からの明示的なアドバイスが必要である。従来から、学習方法については（単語学習や例文は必ず声に出す、VOA 動画や海外ドラマなどは「なりきり」発音しながら観るといい、Duolingo などの練習問題は、簡単すぎると思ったらスキップテストで次に進む方がいい、など）理由も含めた説明を提供しており、語彙文法については、学生の質問に応じたり、身につけていない学生が多いことが観察されれば授業メニューに取り入れられたりしてきた。あるいはペア／グループワークの観察に基づいて、1つ手前のステップを取り入れるなどの活動調整を行ったり「聞き取れなかったら“Excuse me?” でもいいし、“え?” という表情でもいい⁽⁴⁾」といった具体的なアドバイスをするなどの介入も行なってきた。これらは自分が気づいた段階で「随時」行うことが多いが⁽⁵⁾、2020年度の春学期は、遠隔授業にもっとも適さないのが「授業時の観察」であると体感できた。秋学期はこれを補う意味も含めて、フォームで提出させる学生個人の学習の振り返り（目標3；活動E）を組み込むことにした。

メインの学習活動A～Eと、それをつなぐ教員の介入（指導・支援）を含めた授業・学習のサイクルをできるだけシンプルに図示したのが図1である。枠内は活動の同時双方向性を表しているが、同時双方向性の中身はさまざまである。例えば、Cでは学生同士のやりとりが同時双方向的であるが、Aは、教員が用意した自動採点フィードバック付きクイズを利用するもので、終了後フィードバックと採点が即座に与えられるという意味での同時双方向性である。教員が介入するものについては、Kahootクイズは、自分の反応とクラスメートの反応、それを受けた教員のフィードバック、というやりとりがリアルタイムで進んでいくため、同時双方向性が高い。一方、Bは歌の聞き取りを個人でやった後、教員から解説と発音デモが与えられる形であり、「同時双方向」的とはしているが、教員は学生一人一人のできを見てフィードバックしているわけではなく、双方向性は弱い。

枠と枠をつなぐ太線矢印は、学生が始点の経験を終点の活動に直接使う（と想定される）ものである（例：Aで学習・準備したフレーズなどをCで使う、Cについて事前・直前に教員から与えられる目標・指示（デモ）・アドバイスをCに活かす、学習方法についてオンデマンドで与えられるアドバイスをA、Cに活かす、など）。全ての活動がEの対象になりえるが、提出物として明示的に求めているのが「今回のVOA」と「今日の授業」についてのリアクションであるため、矢印でマークしてはいない。

細い線の矢印は、教員が、学生の活動（始点）を受けて提供する活動（終点）を示している。例えば、Eの振り返りとAの結果（採点結果や試行回数）をもとにVOAクイズを使った学習についてフィードバックする、Eの振り返りとCの録画をもとに会話練習やフレーズ学習についてアドバイスや目標を与える、A～Dの振り返りをもとに語彙文法練習を授業時メニュー（Kahootなど）に組み込む、語彙文法の質問に答えて解説の時間をとる、といった介入がこれに当たる（図2）。

点線矢印は、間接的に影響を及ぼす（及ぼしあう）ことが期待される活動同士を結んでい

(4) 遠隔授業でのグループ会議の場合は、カメラオフを選ぶ学生が多く、その環境特有のアドバイスが必要になる。

(5) 経験上「一般的」と思われることについては、ガイダンス時にまとめて配布（遠隔授業では解説動画として配信）するが、新しい選択科目でもあり、実際の受講生の様子を見て随時与えることにしている。

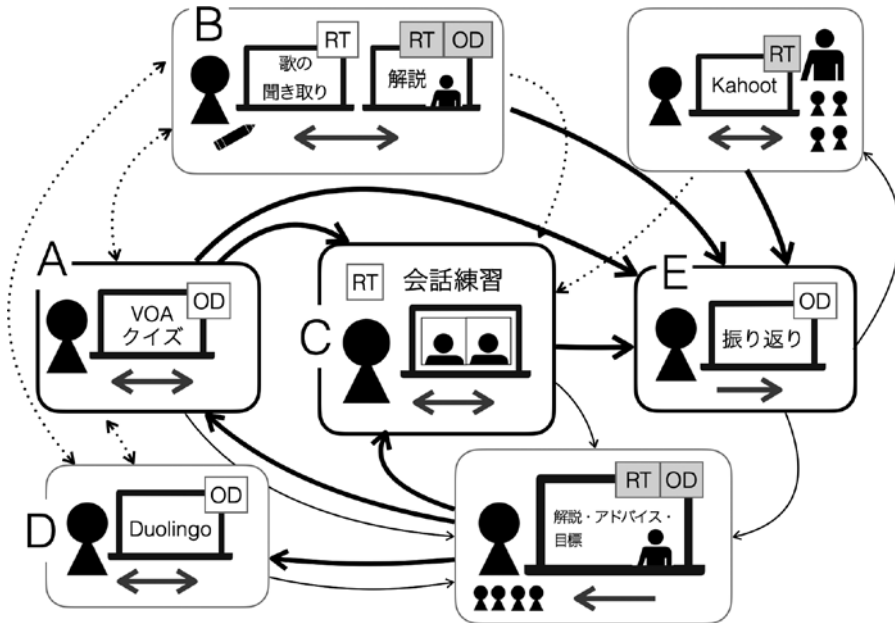


図1 授業・学習サイクル (RT:リアルタイム/OD:オンデマンド)

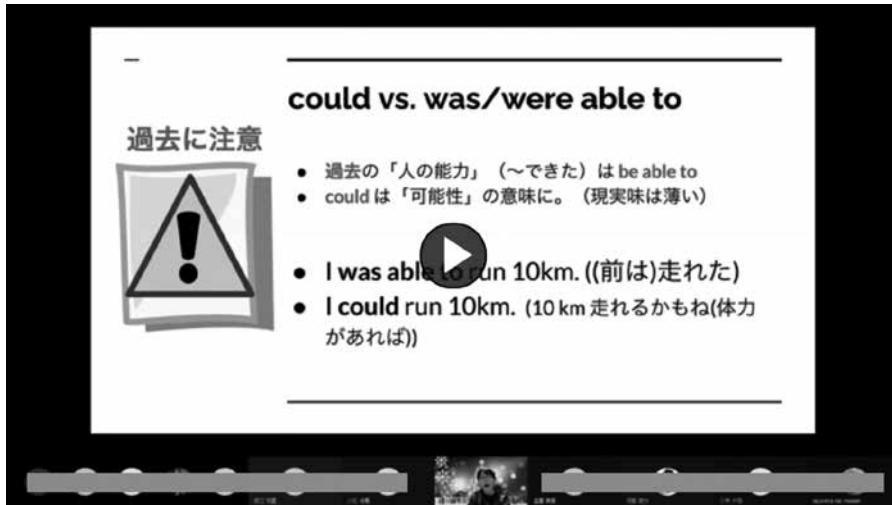


図2 文法解説部分の録画 (Teams 会議)

る。例えば、Duolingo で音と意味がしっかり結びついたフレーズや構文の例が蓄積されていけば、A や B の学習の理解度も向上すると考えられる。A の会話で出てくるフレーズに D や B でも出会えば記憶の定着が進むだろう。B の音声処理の基礎練習を重ねることで、他の素材の聴解にも役立つと期待できる。ただし、自習時の取り組みは個人差も大きく、直接的な影響は想定しにくい。

2.3 受講生の意識調査（事後）

この授業設計の詳細な評価は、学期末の授業評価アンケート（1月19日実施）精査後に改めて行なう予定であるが、10月から12月までの実践の手応えとしては、フルオンライン環境ではそれぞれが噛み合っており、うまくサイクルになっていたように思う。なお、執筆時点では、この授業評価アンケートには受講生24名中19名が回答しており、授業全般の満足度については、大部分の学生（16/19名）が、5段階（5：とても満足～1：とても不満）で4ないし5と答えている（それぞれ7名、9名）。

また、CEFR(共通参照レベル)の自己評価表の記述文を用いて、「聞く」「話す：口頭でのやりとり」「話す：表現する」の3つのスキル領域について、A1～B1の3段階で評価してもらった。「聞く」力についてはA1、A2、B1と自己評価した者がそれぞれ8名、10名、1名、「話す：口頭でのやりとり」の力についてはA1、A2、B1がそれぞれ8名、11名、0名、「話す：表現する」力についてはA1、A2、B1がそれぞれ9名、8名、2名であった。

表3 英語力の自己評価（事後）

スキル	レベル	自己評価表の記述文	回答
聞く	A1	はっきりとゆっくりと話してもらえれば、自分や家族、その場にある具体的なものについて、聞き慣れた語やごく基本的な表現を聞き取れる。	8名 (42.1%)
	A2	直接自分に関わる事柄（ごく基本的な個人や家族の情報、買い物、近所など）なら、よく使われる語句は聞き取れる。短い、はっきりとした簡単なメッセージやアナウンスなら、要点は聞き取れる。	10名 (52.6%)
	B1	学校、娯楽などで普段出会うような身近な話題について、明瞭で標準的な話し方の会話なら要点を理解できる。ラジオやテレビ番組でも、話し方が比較的ゆっくり、はっきりしているなら、時事問題や個人的な話題について、要点は理解できる。	1名 (5.3%)
話す： 口頭でのやりとり	A1	相手がゆっくり話し、繰り返したり、言いかえたりしてくれて、また自分が言いたいことを表現する手助けもしてくれるなら、簡単なやり取りをすることができる。その場で必要なことや、ごく身近な話題についての簡単な質問なら、聞いたり答えたりできる。	8名 (42.1%)
	A2	単純な日常的な作業をしている時、情報を直接やりとりするなら、身近な話題や活動について話し合いができる。短い挨拶程度のやりとりはできるが、たいていは、会話を普通に続けて行くのは難しい。	11名 (57.9%)
	B1	英語圏の旅行中に起こりそうな状況にはだいたい対処できる。家族や趣味、旅行、最近の出来事など、日常生活に直接関係のあることや個人的な関心事について、準備なしで会話を始められる。	0名
話す： 表現する	A1	どこに住んでいるか、また、知っている人たちについてなど、簡単な語句や文を使って表現できる。	9名 (47.4%)
	A2	家族、周囲の人々、住んでいるところ、学歴などを簡単な言葉で、語句をつなげたり、文を使って説明できる。	8名 (42.1%)
	B1	簡単な方法で語句をつないで、自分の経験や出来事、夢や希望、野心などを語る事ができる。意見や計画について、理由や説明を簡潔に話すことができる。ストーリーや、本や映画のあらすじを話したり、またそれについての感想や考えを表現できる。	2名 (10.5%)

それぞれのスキルについて以前と比べて変化があったと思うかを自由記述式で補足してもらったところ、「聞く」力については14名が、「話す：口頭でのやりとり」の力と「話す：表現する」力については13名が、多少なりとも（「少し」「だいぶ」「前よりは」）伸びを実感していることを報告している。具体的な記述を紹介しておく。

(1) 「聞く」力について：

- はい、以前よりも聞きながら単語や文をスムーズに理解できるようになりました。
- 完璧な聞き取りではなくても、ある程度何を聞いているのかを理解できるようになった。
- 歌などでも勉強したのでリスニング力は上がったと思う。
- ゆっくりだが聞き取れるようになってきた。
- 前よりは聞き取れるようになりました。
- 英語への苦手意識がとても大きかったのですが課題や単語演習をしていくうちに、嫌ではなくなりました。

(2) 「話す：口頭でのやりとり」の力について：

- 今まででは単語でしか話せなかったが、短い文で話せるようになった。
- 前よりも英文が出ないということは少なくなったような気がする。
- 授業中にいろんな人とグループワークしたことによってどのようにしたら相手に伝わるかを考えさせられました。
- はい、話すことへの意欲が高くなりました。もっと話したかったと思える位楽しめていると感じています。
- 文法的に間違ってしまう部分もまだあるが、適切な単語を用いて会話できるようになってきた。
- 身近の質問には答えられるようになりました。

(3) 「話す：表現する」力について：

- はい、表現の単語についての興味や関心が高まり、他の言い方で話すとうろたえようかと考えるようになりました。
- 情報の詳細を説明できるようになってきた。
- リアクションをしたりできるようになった。少しだが語句をつなげて言えるようになった気がする。
- Duolingo などを通して単語を覚えることが出来た。

同じ自己評価を事前調査で行なっていないのだが、授業準備段階で想定した通り、受講生は、知識面での違いには関わらず、全般的に音声処理する力は弱く、VOA 動画の初期のものでも「簡単すぎる」とは感じた者はいなかった(2.1)。話すスキルについては、最初のグループワークでかなり工夫しても、英語以外の要因（緊張する、間違いを恐れるなど）とアウトプットの経験不足からくる症状（知っている表現でも口からすぐに出てこないなど）から沈黙する人、日本語になってしまう人が観察された⁽⁶⁾。そうした初期状態を踏まえて事後調査の結果を見ると、到達目標・指導目標（1と2）に沿った学習活動が

提供でき、音声面の強化ややりとりする力の強化という目標が、学習者それぞれの習熟度に応じて達成できたのではないかと思う。なお、実際の「伸び」を観察するために、グループ活動の動画記録や最終回の授業での「スピーキングチェック」（教員との対話）の分析を行う予定である。

「話す：口頭でのやりとり」については、グループ（ペア）での会話練習に対する意識が変わったかどうか、変わった場合はどのように変わったかを、自由記述式で聞いた。変化なし、未回答それぞれ1名を除く17件中、「面白くなった」などの漠然とした記述以外のものを紹介する。恥ずかしさや間違いを恐れる気持ち（外国語不安）が減少した（(1)～(6)）、グループでの会話への取り組み方に自覚的になった（(7)～(11)）、というようにそれぞれのやり方で有効活用できていた者が多かったと言える。ただし、(12)のようなネガティブなケースを拾えなかった点が、次の実践に向けて改善すべき事項である。

- (1) やっていくうちに間違えた時の恥ずかしさがなくなってきて分からなくても黙るのではなく失敗しても伝えようと思えた。
- (2) 最初は、会話することに緊張してましたが回を追うごとに慣れてきて自分から話せるようになりました。
- (3) 質問だけでなく、相手の解答に対して更に質問できるようになった。恥ずかしいと考えることが受講前は強かったが、現在はあまり感じなくなっている。
- (4) 最初の頃は受け身だったり間違えるのが怖くて少し無言になりつつあってけれど、だんだんたくさん話せるようになりました。
- (5) 一番最初のグループワークは間違えたら恥ずかしいなどの気持ちが強くあまり積極的に話せなかったが、何回も行っていくうちに、英語で会話することに少しずつ慣れていき、積極的に英語で話したいと思うようになった。
- (6) とりあえず間違ってもいいから何か言うように意識が変わりました。
- (7) 授業で学んだことをすぐにグループで実践してみることができるので記憶に残りますし難しかったなど感じる部分も分かりやすくなって、だれかと英語で話すことは英語を学ぶ上でとても重要であることに気づきました。
- (8) 相手に伝わりやすいように意識して取り組みました。最初はグループワークなんて…と聞いていましたが最終的にはコミュニケーションを取ることがとても楽しくなりました。英語を上達させるために自分から話を振るようになった。
- (9) 相手が話したことに対して反応するようにした。
- (10) 元々は、たどたどしくても話せる自信があったのですが、いくら文法や単語を覚えても、咄嗟に出てこないことが多々あり、それからはすぐに別の言い方に切り替えることも意識に入れるようになりました。
- (11) できるだけ日本語を使わないように意識した。
- (12) 最初は楽しみに思っていたが、話しかけても返答が無かったりということがあるとだんだん億劫になっていった。オンラインならではの難しさを感じた。

(6) 「沈黙」状態になるのは、カメラオフで話すという環境による部分も大きい。それを避ける工夫については、山内（2020b）も参照されたい。

最後に、到達目標・指導目標の3番目にあげた「外国語の学び方」についての事後調査を見ておく。これについても事前調査はしていないが「音声面が弱い」ということから、単語は発音を気にせず覚える、構文練習を口に出して行なったりしない、といった学習方法が想定できる。また、頻繁に出会わない情報は使える知識にはならないことから学習中の言語には頻繁に触れ、使うことを習慣化する必要がある。意味と形（音・文字）を結びつけてインプットする、口から出せるように訓練する、知識を使うことを習慣化する、という外国語学習の基本中の基本を、上述の学習サイクルの中で、教員からのアドバイス（「英語の音で覚えていなければ聞いて分かるわけがない」「口に出したことがないフレーズがとっさに出てくるわけがない」「口を使うと耳もついてくる」など）も随時受けながら、体得し自覚してもらうことを意図した。

事後調査では、基本中の基本の具体例として、「洋楽は歌詞を見ながら聞いて、真似して歌う」「英語の文章は、英語の語順で理解しようとする」「単語を書いて覚える時は、発音も確認し、口に出しながら書く」「単語や語句は、口からすぐ出てくるまで練習する」について、自分の学習法にどの程度当てはまるかを5段階（5：完全に当てはまる～1：全く当てはまらない）で聞いた。図3に示すように、5ないし4と答えた者は半数から7割弱であり、「学び方」を体得・自覚してもらうという面では、実践方法に改善の余地がある。

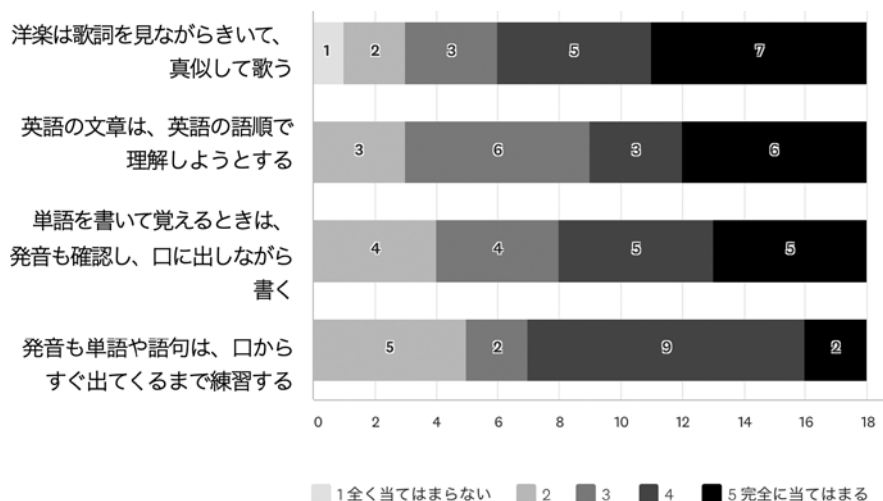


図3 英語の学習方法（事後調査より）

学習方法の変化については、自由記述式で別途答えてもらっている。具体的な記述だったものを見ると、音と意味を一致させる、耳と口を使う、習慣化する、使える知識にする、といったポイントが自覚されていることがうかがえる。

- VOA でただ問題を解くのではなく、動画を見ながら声に出したり言い方を真似するように工夫をするようになってから、もっと英語を口に出したいと意欲が湧いた。
- 声に出しながら問題を解くようになりました。

- 英文を聞いたり耳を鳴らす（ママ）ことが重要だと分かった。
- 単語の勉強をする際に声に出しながら勉強するようになった。受講する以前より洋楽を聞くようになり、分からない単語は調べている。
- 洋楽を発音や歌詞に注目して聞くようになった。
- 洋楽を聞くようになった。海外の映画を吹き替えではなく字幕で見るようになった。
- ほぼ毎日一日一回は何かしらの VOA の動画を見て英語のリスニングの練習をしている。
- 今までが気が向いたらやる、といった感じだったのですが英単語や VOA などの課題によって学習が習慣化されたように感じます。
- Duolingoのおかげで、毎日英語を学習する習慣が身に着（ママ）きました。
- 今まで Duolingo というものがあることすら知らなかったのですが課題の中でこれを続けてきたことのでかなりの自信につながっているような気がするので続けたいと考えています。
- アプリを使った英語学習は初めてだったのですが、空き時間にもできるので便利だと思いました。これからも使っていきたいと思います。
- 毎週、Duolingo をする習慣がだんだんつきました。
- わからない単語をメモしたりグループの人に教えてもらったのをその場で使えるように努力した。
- 積極的に英語を使うようになった。

以上、授業期間中の観察と事後アンケートに基づいて、この実践について中間的な評価を行った。他の記録と合わせて詳細な分析をする必要はあるが、指導目標を達成するために設計した授業・学習のサイクルは、概ね、意図通りに機能したと考えている。

以下ではこの授業・学習のサイクルを構成するオンラインでの学習活動について説明を加える（4節）が、その前に、授業実施方針が変更された場合について検討しておく。

3. 異なる授業方式への適用可能性

ここでは、2020年度秋学期に、フルオンラインの環境向けに設計した授業・学習サイクル（図1）が、それ以外の授業方式でも通用するかどうかを検討する。

まず、完全対面が可能になったと仮定すると（しばらく難しいように思うが）、Bについては、ほぼこのままのやり方で同時双方向性を上げることができ、より効果的に進められる。特に、今回の実践で、以前はベストだと思っていた紙版ワークシートの利用が、必ずしも必要だったわけではないことに気づいた。書く効率は下がるかもしれないが、画面でワークシートを見ながら、ノート（ルーズリーフでなく）に自分でポイントをまとめさせる方がむしろ望ましいかもしれない。Cの会話練習も、教室内の移動も含めてビデオ会議では実施できない様々な活動が行える⁽⁷⁾。また、ワーク中の様子を俯瞰できるのも対面

(7) 特に、Nationの“4-3-2”をアレンジした「45秒トーク」のようなFluency Trainingは、アイスブレイクとしても使いやすく、対面時は非常に重宝する活動であるが、現時点での遠隔授業環境では実施できない。

環境の利点である。ただし、俯瞰はできるが、同時に個々のグループを細かく見ることは対面時でも無理である。遠隔環境で採用したグループワークやペアワークの録画は、対面時でも何らかの形で取り入れたい。フォームを利用したA(VOAクイズ)とE(リアクションペーパー)、学習アプリ(Duolingo)を利用した各自のペースでの基礎がためは、このまま取り入れられる。もちろん、対面時はフィードバックがより柔軟に行えるというメリットがある⁽⁸⁾。以上のように、全面対面授業であれば、この授業設計のまま対応できそうである。一時的に全面オンラインに切り替える必要があっても問題はないだろう。

対面での受講生と遠隔の受講生が混在する、いわゆる「ハイフレックス」タイプの場合は、1週間ごとの学習サイクルが可能ではある。学生が行うA~Eの活動については、Cの会話練習以外はほぼ問題なく行えるだろう。Cについては、対面と遠隔で受講生を分けてグループを作れば、対面組はリアルで、遠隔組はビデオ会議でグループワークはできる⁽⁹⁾。ただし、A~Eは全て遠隔で十分にできる活動である。対面組に、対面授業に来た甲斐があると感じさせるには、対面ならではのメリットを示す必要が出てくるだろう。制限のある対面での会話練習については対面ならではのメリットが出せるかどうかは心許ないが、対面組のワークには教員がその場でフィードバックを与えることができるので、そこをメリットとして強調することはできるだろう。その様子の録画もうまく使えば新たなフィードバックの形も可能かもしれない⁽¹⁰⁾。また、Bについては遠隔環境では一斉の発音練習ができないが(「リピート」の時間はとるが、学生のマイクはオフのままで、テレビの語学番組のような進め方になる)、ハイフレックス環境なら、対面の学生だけに声を出させるのも一案だろう。A~E以外、つまり教員主導の活動のうち、Kahootについては、遠隔でも楽しめるが、対面の方がさらに楽しく授業参加促進の効果が高い(山内, 2017)。Kahootの位置付けを変えて全体設計を調整する方がいいかもしれない。最後に、ハイフレックス環境で懸念される問題は、遠隔組・対面組のいずれかが「置いてきぼり」感を味わうことだろう。1人の教員が複数の対象に平等に注意を向け続けるのは難しい⁽¹¹⁾。ただし、この授業設計では、教員が全体に向けてリアルタイムで指示・解説などを与える時間は合計で30-40分程度である(6節)。現在の遠隔環境では一方向にしているが、通常の対面環境では質問やコメントも奨励し双方向的である。どちら寄りにするのか

-
- (8) ただし「課題」提出は、オンライン環境の方がしっかりこなす学生が多いように思われる。対面が再開したら、遠隔経験者についてこの点を改めて調査したい。
- (9) 対面の受講生がかなり少なければ(30名程度の教室で3名など)、対面の学生1人を含めたグループがあっても、遠隔・対面の双方にとって、会話にはあまり問題はでなかった。ノイズの問題は端末やヘッドセットに依存すると思われる。
- (10) 例えば、教員がスマホなど別端末でも会議に入っており、その端末を持って、教室の会話に介入しながら、その様子を「一般」チャンネルの会議で共有・録画するのも一つの手だろう。その間、遠隔組はそれぞれグループ会議をしているが「一般」を見にきてもいいとするのはどうだろうか。
- (11) ビデオ会議でウェブカメラを見ながら「語りかける」のには慣れてはきたが、教室に学生がいるなら彼らとのインタラクションに注意が行くだろう。対面授業で皆に視線を移していきながら見回すことは、教員は自然にやっているだろうが、その中にウェブカメラも入れられるようになるには、相当の慣れが必要だと思う。ハイフレックスに慣れていないホストによる、とあるイベントに遠隔参加した経験がある。ホスト側の立場は理解できたので「これは大変だ」と共感する気持ちが強かったが、一参加者として体感した「置いてきぼり感」はかなりのものだったのも事実である。

は設備や授業の実施方針次第ではあるが、ハイフレックス環境の対面活動は通常の対面時とは別物と割り切り、全体の同時双方向性を減らし、音声・画面などの切り替えをシンプルにすることで、対応しやすくなるだろう⁽¹²⁾。

オンデマンドとリアルタイムでの学習を交互に行う「隔週」タイプの場合は、2つのグループに対して2週間ごとの学習サイクルを考えることになるため、同様の活動を組み合わせるにしても、組み立ては大幅に変更せざるをえない。会話練習は1~2メートル離れてマスク着用、移動なしで行うとすると、その環境に即した活動を考える必要があるだろう。ただし、インタラク션을重視する現在の設計からすると、会話練習の機会が2週間に1度というのは頻度が少なすぎるため、元々の設計から変えるべきかもしれない。

以上をまとめておく。ここで論じてきたオンライン教材を活用する授業・学習のサイクル(図1)は、完全対面環境では、対面ならではのメリットも加わってより良い形で実施できる。教室にいる受講生と遠隔受講の学生が混在するハイフレックス環境では、留意事項はあるが対応は可能である。学生主体の学習活動はフルオンライン環境と同様に行える。

Kahootクイズは、フルオンラインよりもハイフレックスの方が効果が高い可能性がある(通常の対面授業時がベスト)。教員が全体に向けてリアルタイムで指示・解説などを与える時間については、ハイフレックス環境での「対面」は通常の対面授業とは別物を割り切って、双方向性を下げ、提示をシンプルにすれば対応しやすくなるだろう。オンデマンドとリアルタイムでの学習を交互に行う「隔週」タイプの環境では、2週間で1サイクルになるため大幅な変更を検討する必要がある。

4. オンラインでの学習活動

前節では、ここで論じている授業・学習サイクルが、異なる授業環境にも柔軟に対応しうる設計になっていることを確認した。ここでは、そのサイクルを構成するオンラインでの学習活動を考察する。なお、振り返り(E)については5節で取り上げる。

4.1 VOAクイズ(活動A)

ここで言う「VOAクイズ」とは、会話主体のメイン教材として選んだVOA Let's Learn EnglishのLevel 1を使った自動採点フィードバック付きのクイズである⁽¹³⁾。学期開始前に、授業用に毎回の会話練習のテーマと結びつけたVOAクイズを10回分、そして中間・期末の復習用クイズを用意した⁽¹⁴⁾。

図3は第7回目のVOAクイズである。テーマを“Plans & Suggestions”とし⁽¹⁵⁾、

(12) 例えば、通常の対面授業なら手軽に板書も使うが、設備面で板書を映すカメラがあったとしても、板書映像とパソコン画面の切り替えがややこしければ、ハイフレックスではその切り替えはやらない方向で考えた方がいいように思う。通常の対面授業なら自然に行える教室全体でのインタラクシオンも、ハイフレックスで再現しようとすれば相当の設備や切り替え作業が必要になる。

(13) 春学期は、メイン教材として市販の会話練習本を選んだが、オンライン教材に利用するのが難しいため、秋学期からVOAをメインとすることにした。

(14) VOAクイズは、Level 1については、52レッスン中45レッスンほど作成しており、Level 2は30レッスンの全てについてクイズができています。既存のFormsを下敷きとして、この授業用にアレンジしたクイズを作成した。

Lesson 17とLesson 21を利用した。Google Formsを利用し、VOAのレッスン動画、動画内容に関する問題、語彙文法問題、そして語法・文法の解説を入れてある。図4はクイズの一部を抜粋したものである⁽¹⁶⁾。また「振り返り」を促し、次の授業の会話練習で使うことを意識させるための質問を最後に置いている(図5)⁽¹⁷⁾。

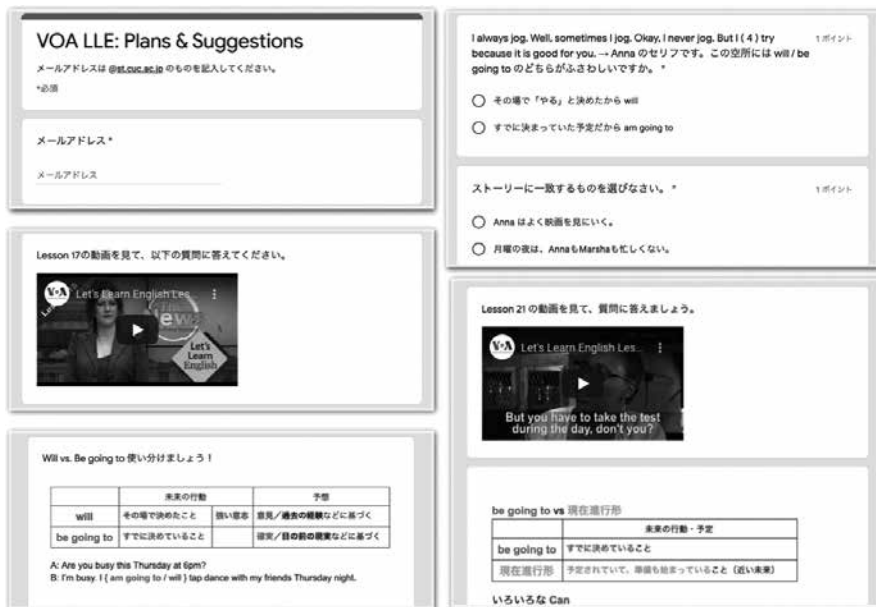


図4 自動採点式 VOA クイズ #7 (L17 と L21 を利用)

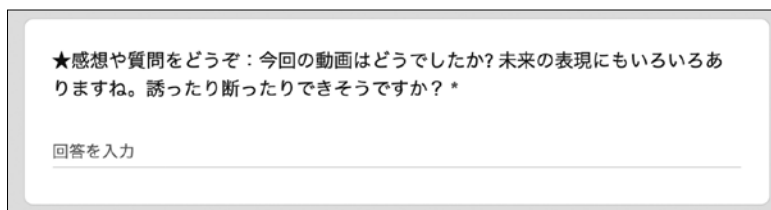


図5 クイズ末尾の振り返りを促す質問

なお、Google Formsのクイズ⁽¹⁸⁾では、提出(送信)後に表示される「フィードバック」を入力しておける(図6)。学生は、動画を見て、文法説明も確認しながら、設問に答える。提出後すぐ自分の解答と、採点結果、フィードバックが確認できる。「テスト」ではなく、基礎「練習」、そして次の授業での会話の「準備」という位置付けなので、動画は何度見

(15) このテーマに沿って、ここで出てきた表現も使って授業時の会話練習が行われる。

(16) Microsoft Formsも試用したが、フォルダで整理できない、問題タイプも少ないことから、Google Formsを選んだ。

(17) 「振り返り」については後述(5節)。

(18) 「テスト」モードを選ぶことで自動採点式のクイズが作れる。

☑ 正しい解答を選択してください:

I always jog. Well, sometimes I jog. Okay, I never jog. But I (4) try because it is good for you. → Anna のセリフです。この空所には will / be going to のどちらがふさわしいですか。 点数

その場で「やる」と決めたから will ✓

すでに決まっていた予定だから am going to

正解に対するフィードバック ✎ 🗑

訳：「ジョギングはいつもしてるわ。ええと、たまにはするわ。オーケー、ジョギングは全然してないわ。でもやってみる。身体にいいからね」

不正解に対するフィードバック ✎ 🗑

訳：「ジョギングはいつもしてるわ。ええと、たまにはするわ。オーケー、ジョギングは全然してないわ。でもやってみる。身体にいいからね」

図 6 Google Forms クイズ編集画面

でも良く、再提出も可能である。

VOA クイズは授業前日を締切としており、教員は、全体の結果と個々の質問の正答率や間違い方⁽¹⁹⁾と合わせて個人ごとの「振り返り」を確認することができる。それに基づいて次の授業時に行うフィードバックを用意し、会話練習の調整を行う。

例えばこの第7回のクイズで言うと、語法文法に触れたものの中では、以下のように will と be going to に触れた学生が多く (8/17 件)、若干名が不安を表明している ((5), (6), (7))⁽²⁰⁾。フォームの回答分析で will と be going to に関する設問 (複数) をざっくり確認すると、確かに誤答率が高め (15~16%) だったため、will と be going to と含む復習クイズ (同じく Google Forms 利用) を行うことにした (4.4)⁽²¹⁾。また、事前に計画していた「誘ったり断ったり」する会話はやめて、予定を聞き合うシンプルな会話とした。なお、それ以外の質問には、Teams の全体向けの投稿で対応している (6 節)。


- (1) 未来の事を表すときに going が事前に決まっていたことで、will がその場で決定したことという決まりを、もう一度復習することができ、良かった。
- (2) 未来についての動詞の使い分けが振り返れたので、次回からできそうです。もう予定が決まっていて準備をしているときは Be ing 形を使うのがそういえばそうだったなあと印象に残りました。
- (3) 今まで Will と Be going to は一緒だと思っていたが、Will が今決めたことで

(19) 結果はスプレッドシートに出力される。また元のフォームを開ければ、個々の回答の分析結果をグラフで確認できる。

(20) ストーリーについてのコメント 5 件は除外している。

(21) 新しく作る場合もあるが、この時は既存のものが使えそうだったのでそれを複製・編集した。

be going to が既に決めていたこと、だと知れてよかった。

- (4) will と be going to の違いがあまりよくわかってなかったのがためになった。
- (5) 意味を理解した上でテストに答えることは出来ましたが、実際に英語を話す時に will と be going to, can と have to の使い分けが曖昧になってしまうので、どちらを使うべきかをしっかり理解したい。
- (6) will と be going to の使い分けが曖昧だと感じた。
- (7) 今回は少し難しいと思いました。will と be going to の使い分けもまだ不安です。
- (8) 本当に些細な疑問なのですが、going to を略すとなぜ gonna になるのかなと思いました。
- (9) 個人的に難しく感じたのでこの表現が自分は苦手なんだなという事に気づくことができました。
- (10) 一気に難易度があがってついていけなかったです…
- (11) I do? これは文法としてあっているのでしょうか？
- (12) 動画はやはり、何回か止めながら見ないと理解できないので、もっと英語に触れて英語に慣れていこうと思います。
- (13) Can にはいろいろな使い方があるのだと知った。
- (14) jog という表現は、jogging という形が普通だと思っていました。ing をつけると動名詞になるので、動詞として使う時はingを外すって感じですか？
- (15) May と Can の違いも気になりました！
- (16) 使いわけをゆっくり、繰り返し聞けばわかりそう。
- (17) 意外と忘れていた部分だったので思い出せてよかった

以上のように、この授業用 VOA クイズは、動画を繰り返し見て内容理解、クイズ内の説明も見ながら解答、自動採点と自動フィードバックで確認、クイズの振り返り、クイズで学習／準備したことを会話練習で使用、という流れの中で、会話の中で使える語彙文法を音とともにインプットを助ける自習教材になっており、クイズの結果や振り返りを踏まえた教員からのフィードバック（説明や追加の練習問題）を通じて、さらに理解を深められるようになっている。

4.2 洋楽リスニング（活動 B）

洋楽を使うリスニング指導は20年以上行っており、基本はずっと変わらない。日本人学習者が苦手とする音声変化（山内, 2002; Greer & Yamauchi, 2008）を含む箇所を空所にしたワークシートを使い、歌を流しながら穴埋め（書き取り）、解答と解説、発音練習の順で進める。ワークシートは Google Docs の形でストックしてあり、対面授業では印刷・配布して使っていたが、遠隔授業では共有したワークシートを見ながら、空所に入る語句をノートに書き取る形にした。各自で聞いて穴埋め作業をしてもらい、1曲分程度の時間が経ったら⁽²²⁾、教員が図7のように板書代りの手書きメモを画面共有しながら解説し⁽²³⁾、「リピート」時間を取りながら発音デモを与える。

通常の対面時と比べるとどうしても劣化版のように思ってしまうが、「今日の song は（中略）耳コピで歌っていたので、『あ～、ここはこういう単語が入ってたのか！』と知



図7 洋楽リスニングの「板書」メモ

ることが出来て良かったです！！！！」授業で行っている歌の穴埋めで、単語を繋げて読むなどのコツがつかめてきた。そのため少しずつ聞き取れるようになってきた」といったポジティブな反応も来ており、事後アンケートを見ても (4.5), 目標の音声指導を提供できたのではないかと思う。

4.3 Duolingo で基礎がため (活動 D)

Duolingo はパソコンでもモバイル端末のアプリでも使える語学自習ソフトである。学習継続を助ける様々なゲーム要素 (ログインボーナス, デイリーゴール, 目に見える進捗, ステージクリアの報酬としての次のステージ開放, ランキング⁽²⁴⁾ など) が組み込まれており, 間隔反復や想起練習効果 (テスト効果), 帰納的 (発見) 学習を促すように言語素材が提示されるレッスンを, ゲーム感覚で日々こなしていく。短文ベースのクイズに加え, 新しく「ストーリー」も登場し, リーディング (+リスニング) 練習が増えた。

Duolingo の英語コースのカリキュラムは, 本稿で対象としている受講生のような CEFR の A1~A2 レベルの学習者が自分のペースで基礎がためをしていくのに最適な難易度である。ただし, ゼロから始められるカリキュラムになっているので, 最初の方のレッスンは簡単すぎるはずである。最初のプレイメントテスト, 1つのスキル (単元) ごと

-
- (22) 前期は空所のところで止めながら一斉に聞かせていたが, それは対面時のやり方の名残りでしかないことに気づき, 各自でのリスニングに変えた。対面時は一旦止めて書いてもらう時, 学生の反応を見て, 難しそうならその部分だけ何度か繰り返すという風に, 彼らの聞き取りをサポートする意味合いがあった。カメラオフでは反応が確認できないので, 止めて繰り返すにしても「適当」にするしかない。
- (23) 手書きメモには iPad の GoodNotes と Apple Pencil を使っている。たまに画面共有がうまくいかないこともあるが, その場合は Google Docs の方に答えと解説メモをタイプしてのぐ。
- (24) 週ごとに XP 獲得量を競い合い, 同じ「リーグ」内でランダムなチームが作られ, そこで上位になったら次の「リーグ」に進む仕組みである。この秋学期は「リーグ」を気にする学生が数名登場した。彼らの質問を受け, リーグが上がったら「エクストラポイント」を加算することに決めた。個人チャットでの報告によれば, 少なくとも 2 人がトップの「ダイヤモンド」リーグに到達しており, 「パール」リーグ (上から 3 番目) 到達の報告も受けた。次は「リーグ」昇格も「目標」として取り入れてもいいかもしれない。

のスキップテスト、いくつかのスキルをまとめたチェックポイントテストを活用して、学習が必要なスキル（スキップできなくなったスキル）からレッスンに取り組むのがポイントである。リスニング問題、スピーキング（発音）問題もあり、問題文や「ストーリー」の全てに音声がついているだけでなく、単語ごとに音声と意味を確認することもできるため、知識のわりにリスニングが極端に弱いなど、音声面の基礎訓練が必要な学習者にも適している。

Duolingo for Schools を利用することで、簡単に Duolingo 課題を配信できる。Duolingo 課題は、特定のスキル（単元）のレッスンを指定してもよいし、一定の学習量（XP）を指定することもできる。本稿で論じてきた「基礎英語」の受講生は知識面のばらつきが想定され（2節参照）、基礎がためは、各々で自分にちょうど良い学習をやってもらう必要がある。彼らのための Duolingo 課題は XP ベースがふさわしく、「基礎英語」では「毎週 100XP」を課題とした⁽²⁵⁾。13 週の授業期間で、極端な値を除いた 21 名の平均が 1800XP（約 220XP が 1 名、約 8400XP が 1 名）であり、事後アンケート（4.5）もふまえると、Duolingo も概ねうまく機能したと考えられる。

4.4 補足教材：Kahoot! など

ここまでは主なオンライン学習活動（A, B, D）について見てきた。以下では、補足的に利用するオンライン教材を紹介しておく。図 1 では Kahoot クイズで代表させているが、これは、VOA クイズで誤答が多かったり（4.1）、「振り返り」で質問があった語法・文法について、教員からのフィードバックの一環⁽²⁶⁾として与えるクイズ形式の練習問題である。同じ位置付けで Google Forms のクイズも使っている。

Google Forms の文法復習クイズは、2020 年度前期に若干ストックが増えたため、複製・編集して特定の授業用のものを用意するのはそれほど時間はかからない⁽²⁷⁾。図 8 に示すように、ポイント解説付きの練習問題（自動採点）にしてある。

Kahoot クイズも、複製・編集して授業に合わせて用意することができれば楽なのだが、現時点ではまだストックが少ない。Public Kahoots の中で、複製・編集して使えるものを探すこともできるが、今のところ、授業用に作った方がしっくりくることが多い（図 9）⁽²⁸⁾。

教員の解説では Quizlet も使う。図 10 はパターン練習用に用意した Quizlet セットのフラッシュカード画面である。音声も確認できる⁽²⁹⁾。「課題」にはしていないがもちろん自

(25) 1 レッスン終了するのに大体 5-10 分かかる。1 レッスンで 10XP たまるので、100XP は大体 50-100 分の計算になり、1 週間分としては無理のない学習量だと判断した。スキップテストやハードプラクティスなら 1 回で 20XP たまるが、1 回分の所要時間も増えがちなので、学習時間としては地道にレッスンをこなすのと変わらないかもしれない。

(26) 2 節で述べたように、語彙文法についての全ての質問に、復習クイズの形で対応するわけではない。説明スライドにまとめたり（図 2）、文字での説明を投稿するだけのこともある。

(27) 複製・編集が容易なので、Google Forms を使った VOA クイズは実際に非常勤の先生とも共有し、複製・編集してお使いいただいている。文法説明つき復習クイズもストックをためていきたい。

(28) とはいえ、世界中の教員と教材を共有できる仕組みであることは間違いない。筆者の作った Kahoots もニッチすぎるものが多いが、全て Public Kahoots にしてある。

(29) 自動音声であるが英語はほぼ自然に近い。ただし日本語は不自然。

習でも使える⁽³⁰⁾。Quizletは一問一答式なので、新規セットの作成が非常に容易である⁽³¹⁾。特定の構文をパターン練習させたいと思った時など「その場で」補足教材を用意できる。もちろん、複製・編集して使えるので、あらかじめ使いそうなセットがストックされていれば、より円滑に授業が進められるだろう⁽³²⁾。

過去-進行形, 現在-進行形, 現在完了-進行形

was waiting, is waiting, has been waiting

He started to waiting at 4 PM.

He was waiting at 6 PM.

He is still waiting now.

Now it's 8 PM. He has been waiting for 4 hours since 4 PM.

4 PM 8 PM NOW

I ___ him for ten years. 彼とは10年前から知り合いです。 1ポイント

have known

have been knowing

They ___ basketball since two o'clock. 彼らは2時からずっとバスケットをしています。 1ポイント

have played

図8 文法復習クイズ (Google Forms)

- (30) フラッシュカード以外に「学習」モード、「筆記」モード、「音声チャレンジ」モード、「テスト」モードで学習でき、2種類の「ゲーム」モードもある。学習セットを用意しておけば、これらを毎回の自習課題にもできる。
- (31) 一問一答のリストがあれば、それを Quizlet 作成画面にコピーペーストして「学習セット」に変換するだけである。
- (32) さらに、Quizlet Live というチーム戦で行うゲームモードもあり、遠隔環境でうまく実施できれば、Kahoot とはまた別の同時双方向活動が可能になる。チーム内でやりとりすることなくチーム戦を行うことも可能であるが、ブレイクアウトルームなどでやりとりをしながら対戦する方が望ましい。これらについては今後検証していきたい (Quizlet の仕様も変更されるかもしれない)。

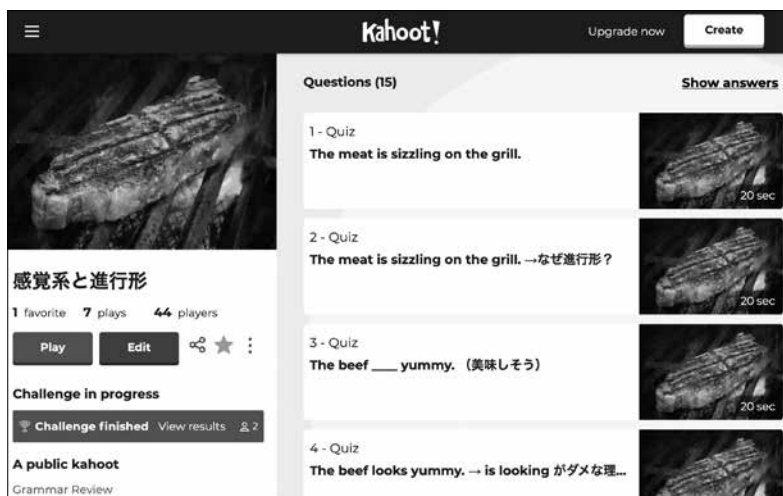


図9 感覚動詞で進行形の用法を整理するための Kahoot



図10 Quizlet フラッシュカード画面 (パターン練習)

4.5 活動・教材の評価

4節では、オンライン教材を活用する授業・学習サイクル(2節; 図1)を構成するオンラインでの学習活動を考察し、VOA クイズでの予習(4.1)、授業時のリスニング(4.2)、Duolingo アプリでの自習(4.3)のそれぞれについて、学習活動の目的と実施法を概観した。また、メインの学習活動に加えて、随時、補足的に用いる教材として、Kahoot! クイズ、Google Forms のクイズ、Quizlet の学習セットを紹介した(4.4)。

2節で触れた授業評価アンケート(1月19日実施; 19名回答)では、これらの活動が「自分の英語力向上に役立ったと思うか」を5段階(1:全然役に立たなかった~5:とても役に立った)で答えてもらっている。いずれの活動についても4や5の回答が多く、概ね、意図通りに機能したと言える。全体的な評価が高い順に並べると、Duolingo、歌の聞き取り、VOA クイズ、文法復習クイズ、Kahoot クイズの順になる(図11)。

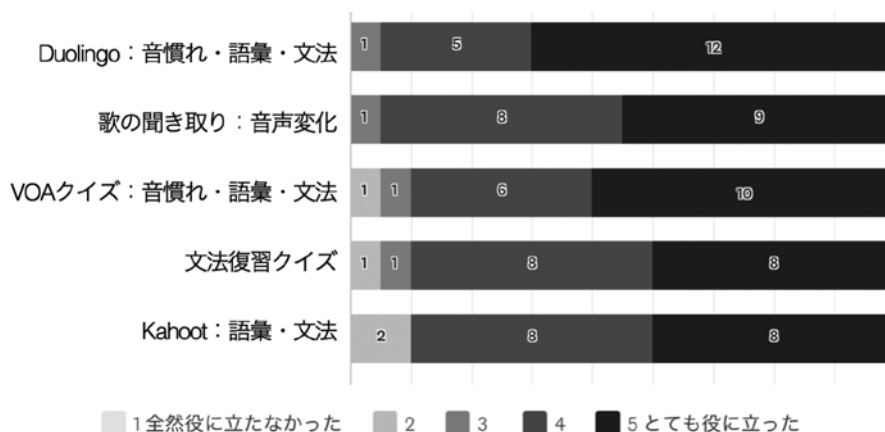


図 11 各オンライン活動の有用度（授業評価アンケートより）

最後に、ここで見てきた双方向教材作成ツール（Google Forms, Kahoot!, Quizlet）はいずれも複製・編集・共有（公開）が容易であり、個人用の教材準備だけでなく、教員間での共同教材開発の面でも期待できる。

5. 振り返り

フルオンライン環境を想定した授業・学習のサイクル（2 節；図 1）において「振り返り」（E）の役割は、各学習活動をつなぐ意味で、また学生・教員間のインタラクションの質を保つためにも、極めて重要である。以下では、学習者にとっての「振り返り」と、教員にとっての「学習者の振り返り」を分けて見ていく。

5.1 「反省」回避

「基礎英語」での振り返り活動には、授業を振り返る「リアクションペーパー」（2 節）と VOA クイズを振り返る最後の質問（4.1）が含まれる。リアクションペーパーも VOA クイズも毎回の提出「課題」である。Kolb (2015；1983) の言うように、経験（具体的経験：CE）を「学び」に変えるのに、学習者とその経験を振り返るステップ（内省的観察：RO）が不可欠である（図 12 を参照）。「課題」（の一部）として毎回取り組んでもらうことで、Kolb の言う「内省的観察」を習慣づけることも狙った。

振り返りでは「自分の良くなかった点」だけに注目してしまうのは望ましくない。『デジタル大辞泉』（監修、松村；goo 辞書版）によれば「反省」には以下 2 つの意味があるが、2 番目の「よくなかった点を認めて、改めよう」という意味が強いように思う。

1. 自分のしてきた言動をかえりみて、その可否を改めて考えること。「常に反省を怠らない」「一日の行動を反省してみる」
2. 自分のよくなかった点を認めて、改めようとする。考えること。「反省の色が見られない」「誤ちを素直に反省する」

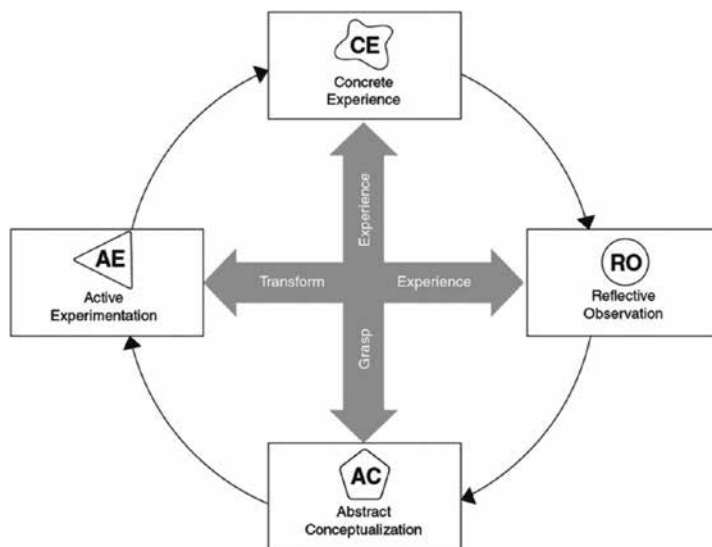


図12 経験学習のサイクル (Kolb, 2015; Kolb, 1983) ⁽³³⁾

言語学習は「できないこと」を「できること」に少しずつ変えていくプロセスであり、「できなかった」ことにだけ注目させるのは、無意味だけでなく動機付けの点で害にもなる。1 番目の意味だとしても「よかったか悪かったか」「できたかできなかったか」を考えるだけでは言語学習は進まない。言語学習で「少しずつ」できることを増やしていくには「次にできるようになりたいこと」を考えて行動に移す必要があるからである。

「反省」寄りになることを避けるために、リアクションペーパーでは、例えば「10/6 の授業ガイダンスやグループワークのお試しを踏まえて、分かったことや印象、コメントや質問、希望や抱負など、思いつくことを書いてください」のように「理解できたこと」や「できるようになりたいこと」などプラス要素にも意識が向くように指示文を作った。図13に示すように、毎回ほぼ同じパターンにした。加えて「小さなことでも『できた』ら『自分をほめる』のが言語学習を続ける鍵！」といったアドバイスを口頭や文字のフィードバックで随時与えた。

VOA クイズの方では「今回の動画はどうでしたか？ 簡単すぎましたか？ There is/are の構文は使いこなせそうですか？ 自分の家や近所のことを話せそうですか？」のように、全体的な感想や難易度に加えて、その動画での学習ポイント（次の会話の準備）に意識を向けてもらう形にしている（2 節も参照）。以下は「VOA クイズ2」の振り返りである。「勉強になった」「復習できた」のような大雑把な反応 5 件を除いてある ⁽³⁴⁾。実際に使う場面

(33) Kolb(2015) が改訂版で補足しているように、この図の学習サイクルはあくまでも「理想化」されたものである。実際の学習プロセスは、ひとつずつ順序よく進んでいくわけではなく、CE, RO, AC, AE の全てに関わりつつ、行きつ戻りつしながら進んでいく。(Kolb, 2015, Ch. 2 Update and Reflections, The Learning Cycle and the Learning Spiral)

(34) 「かなり簡単でした」という 1 件も含む。

12/22 リアクションペーパー

メールアドレスは @st.cuc.ac.jp のものを入力してください。
*必須

メールアドレス*

メールアドレス

12/22の授業はどうでしたか？授業を踏まえて、分かったことや印象、コメントや質問、希望や抱負など、思いつくことを書いてください。「これが言いたかった～」と思うことがあれば教えてください。みんなで共有したら言えることが増えていきますので！*

回答を入力

図 13 「12/22 リアクションペーパー」

に言及している学生は10名（(1)～(10)）と半数未満だが、内容理解にのみ注目している学生（(11)～(13)）も、文法などの知識や「問題ができたかどうか」に注目している学生（(14)～(19)）も、前向きに考えることはできており、(11)や(12)は具体的に自分の学習をモニタリングできている。

- (1) 道端で道案内を英語で頼まれた時などに非常に役に立つ話し方で、仮に自分が道案内を英語で頼まれた時使おうと思った。
- (2) 丁度よい難易度だと思います。There is/are を使いこなして自分の家や周辺の場所について紹介できそうです。
- (3) まだそこまで難しいとは感じませんでした。この構文は道案内などで必ず使うと感じたのでいつでも話すことができるように習得したいです。
- (4) 英語を使っただけの道案内は大変ですが、海外の方に聞かれた時に答えられるようになりたいので使えるようになりたいです。
- (5) 動画を止めながらやらないとできなかった。There is/are は日常会話でよく使うので、よく使っていこうと思う。
- (6) 分からない単語が少しありました。単語では言えるけれど文章では言えないので練習しようと思います！
- (7) 授業を受けるのが初めてなので進め方に多少不安が残るが、内容自体は高校以来の英語だがそこそこ覚えていたので、上手く話せるかどうかはわからないが、がんばりたい。
- (8) 聞き取るのはできた方だと思いますが、実際に話すのは難しそうです。
- (9) 少し簡単でした。／今の所は問題ありません。／話せると思います。
- (10) 使うことができそう。話せそう。
- (11) 前回よりも動画の内容を聞き取ることができた。高度なものになると出来なくなるが基礎ならできると思う。

- (12) 動画を何回も見返しながらできるので時間はかかりますが英語が苦手な私でもなんとかできました。
- (13) ゆっくりではっきりと会話しているので聞き取りやすく、頭に入りやすい。
- (14) There is, are の違いがしっかり復習できて良かった。
- (15) 長い休みで忘れていた部分はあるものの、しっかりできたと思う。
- (16) 英語は大学に入学してからあまり関わる機会が少なかったため、最初はこのくらいのレベルからどんどん難しい問題に挑戦していけばいいと思いました。
- (17) 今回も基礎をやってみて、久しぶりに基礎をやると合っているのか不安になることがあり、基礎をしっかり覚える大切さを予習を行って改めて感じた。
- (18) 動画をちゃんと見ればわかる問題でした。
- (19) 不安な要素が基礎の中でもあるため、自分でもどのくらいできるのか授業以外でも勉強していきたいと考えた。

このように初期の段階から、概ね「反省」は回避できているものの、上の回答事例から除外したような大雑把な「感想」は、振り返りとしては意味がない。学習の助けになる振り返りができるような工夫が必要である (5.2も参照)。1つには、VOA 課題などの出し方として、一定期間後に初期のクイズに再度トライさせることを最初から計画しておくことを考えている。以下は同じ「VOA クイズ2」を、自主的に12月にやってみた学生の振り返りである。早い段階でこのような実感がもてれば、どうやったら次のステップに進めるか、という思考にもつながりやすいように思う。

初期のに戻ると、あれ？あの時は難しいって思ってたのに今だとスラスラ答えられるな。と思った。(12/21 送信)

また、内容理解や知識確認について振り返るのも ((11)~(19)) ももちろん意味はある。が、それだけに注目すると「使える」ようになるための練習につながらない可能性がある。今回の実践では、学生の振り返りを受けたフィードバックとして「具体的に？」と聞き返したり「なりきり発音練習が効きます」のようなアドバイスは与えたりしていたが、フォームの指示・質問の段階で、改良する余地は大いにある。

5.2 教員にとっての有用性

通常の対面授業でも振り返りを書かせたりはしていたが、フォームの利用は2020年度の秋学期が初めてであった⁽³⁵⁾。フォームの回答は、図14のようにスプレッドシートに保存される。回答の列を Teams 投稿に貼り付け、編集しつつ教員からのフィードバックとともにクラス全体与える形にしている。

すでに触れたように、遠隔授業と相性が悪いのが教員による「授業時の観察」であり (2

(35) 技術的に難しいこともなく以前からずっと可能だったはずなのだが、2020年度秋学期開始直前まで、単に思いつかなかった。フォーム (Google Forms, Microsoft Forms) の授業利用が筆者にとっては十分に「常態化」していなかったのだろう (Bax, 2003; Bax, 2011; 山内, 2020b)。



図 14 リアクションペーパー回収用スプレッドシート

節, 3 節), フォームでの振り返り提出は, 授業時の観察不足を補う意味もあった。初回の振り返りを見て, 自分がいかに「学生の反応」に飢えていたかを自覚するとともに, 事後ではあるが「授業時の観察」を十分に補えるインプットだと実感した。

表 4 に, 初回のリアクションペーパーの回答とそれに対する教員からのフィードバックの一部を示す。「フィードバック」チャンネルの投稿で共有したものである (6 節)。個々の回答は短いのだが, 具体的な記述が多く授業計画の調整に十分役立つ。また, 表 4 に示すように, 回答をグルーピングすることで, 個別ではないが具体的なアドバイスを与えやすくなり, 何が難しく何を伸ばしたいと思っているのかなど, クラス全体についてざっくり把握するのも容易になる。

対面環境であれば, 楽しんでい様子, 英語が出てこなくてもどかしがっている様子はすぐ分かるので, 「様子を見て」その場で, 個人や全体に声をかけたり活動を調整したりと介入するだろう。表 4 のフィードバックのような声かけは, ものによっては「耳にタコ」ができるほど繰り返す。ただし, 非言語情報はふんだんに得られるとはいえ, 顔に出さずに考えていることや言語化されていない思いはやはり汲み取れない⁽³⁶⁾。対面授業時を振り返ると, 「様子が分かっている」と思い込んでいたかもしれない, と自覚せざるをえない。フォームでのリアクションペーパーは, 授業時の観察ができない遠隔授業では必須と言えるが, 通常の対面環境でも言語情報として有用である。

対面環境では, リアクションペーパーの媒体として, 紙も選択肢に入ってくる。ここでは, フォームでのリアクションペーパーの利点の一つとして, 個別の学生の振り返りを複数回分 (継時的に) まとめて見渡すことが容易だという点をあげておきたい。普通は 1 回

(36) 自己開示の度合いが高く思ったことが口から出てくるタイプの学生は, 授業中でも随時, 「単語覚えられないんですよ～」などと聞かれなくても教えてくれるが, それでも授業前後の雑談などで話さない限りは「考え」までは分からない。

表4 「10/6 リアクションペーパー」に対するフィードバック (一部抜粋)

リアクションペーパー (10/6)	フィードバック (10/7)
<p>〈全部言ってくれました。ありがとう!〉 (略) グループワークは初対面の中明るい雰囲気英語を話すことが出来ました。これから英語を少しずつ話せるように、また英語を通して少しでもコミュニケーションが取れるように英語の知識や理解を深めていきたいです。</p>	<p>英語で話すのを楽しめたようで良かったです。つたなくてもいいのでどんどん使っていきますよ。口から出しているうちに、スツと言えるフレーズやパターンが増えていくので!</p>
<p>〈英語を伸ばしたい〉 ・私は今二か月前から英語の勉強をしています。目標は卒業するまでに、英語を話せるようになることです。自分はまだ基礎が全然できていないので、この授業で、基礎を身につけて、目標に少しでも近づけたらと思います。 ・<u>基礎力を上げれるようがんばりたい</u> ・<u>文法がよくわかっていないので、わかるようにして話せるように、質問に答えられるようにしたいです。</u>また、私は洋画を見るのが大好きなので少しでも聞き取れるようになりたいと思います。きちんと学べるよう努力します。 ・英語への苦手意識を無くしていきたいです。</p>	<p>話せるようになりますよ! 完璧は目指さないように。まずは意思疎通ができればOK、その後にもっと自然な言い方とかかっこいい言い方とかを増やしていくという感じで、頑張りましょう! 文法や単語の基礎をやるときも必ず口に出して練習しましょう! そうすればやった分だけ会話でも使えます。聞き取りのポイントも入れていく予定です! このクラスは英語のレベル別にはなっていないので、人それぞれ。なので授業ではさらっと流されたけどここ苦手だな~と思ったらいつでも質問・相談してくださいね。</p>
<p>〈楽しめた〉 ・(略) グループワークではみんな積極的だったので楽しくできた。(略) ・英語を使って話をするのは難しいが<u>すごく楽しい</u>。また、英語ではあるが、同じ一年生と話す貴重な時間が得られてよかったと思う。 ・英語で会議をするのが初めてで<u>できこちなかったが楽しくできたんじゃないか</u>と思う。 ・グループワーク (略) 実際にやってみて全くスムーズでは無かったけど授業が楽しかったです。(略)</p>	<p>スキルを身に付ける時は、なんでも最初は難しいですよ。チャレンジが楽しくて良かったです。皆で、使える英語をだんだん増やしていく感じでチャレンジを続けましょう。クラスの人もどんどん知り合いになってくださいね。</p>
<p>〈英語が瞬時に出てこない〉 ・最初のグループワークだったので少し緊張した。質問するときに言いたいことが出てこなかったの、その言葉を調べて、次の時に言おうと思う。 ・<u>英語を瞬時に話すのは難しかった</u>のです。 ・<u>瞬時に思ったことを英語にすることは非常に難しいのだと改めて実感した。</u>自分のスピーキング力を実感し、さらにスピーキング力を高めようと思った。</p>	<p>瞬時に口から出てくるようするには、「あ~出てこない~」という状態で話す練習が必要なんですよ。(略) 調べたり思い出したりして「こう言えばよかった!」というのを積み重ねると、言いたいことが出てくるまでの時間が短くなります。(略)</p>
<p>〈会話をつなげたい〉 ・こういう風に人と英語で会話する機会が今まで全くなかったの、いざ話してみると全然思っている風に話せませんでした。(略) 次はスムーズに会話できるようになりたいです。また、初対面のこともあり<u>あまりキャッチボールが出来なかったことが後悔</u>です。(略) ・グループワークはとても緊張したが楽しかったです。(略) 会話で誰かが発言した後、無言になるよりも<u>相槌</u>などがあるほうが話しやすいなと思いました。</p>	<p>キャッチボール、重要ですね! 相槌とかリアクションも欲しいです! 見本ではできるだけキャッチボールになるように(略) してみたんですけどね...ワークの説明が不十分だったかもです。それとフリーな部分が最初は難しいですね。次からは本番なので、<u>ワーク前の説明とか練習</u>をしてからグループに分かれるやり方にしますね。</p>

分を全体的に見るだけだが、気になる回答がある時など、その個人を「検索」窓にいれ、シートを移動しながら回答をチェックしていくことがある。全回分が1つのスプレッドシートに保存されているから容易だが、紙版では、非常に小さなクラス以外では手間がか

かりすぎる。

ここで、何人かの学生をピックアップして複数回の振り返りをまとめて見ておく。例えば、学生 A は、自分ができることとできないことがきちんと対比できる学習者であることが見てとれる。2 週目は少人数グループ vs クラス全体、4 週目は「マニュアル」（サンプルとしてあげてある例文）通りの文 vs サンプルになオリジナル文、5 週目は一往復だけの Q&A vs それ以上続くやりとり、9 週目は先生の説明を理解すること vs 自力で問題を解くことが的確に対比されている。このような対比ができていると「今できないこと」を「次の目標」として把握しやすい。12 週目は、同じ教材に取り組んだ過去の自分と今の自分を対比して、伸びを実感している。

〈学生 A〉

- 2 週目 (10/13) : みんなの前で話すのは恥ずかしいし話ずらいけどグループになって少人数だから凄くやりやすかったし間違えてもあまり恥ずかしくないので発言しやすかった。
- 4 週目 (10/27) : マニュアル以外で質問するのが難しかった。Why しか言えませんでした。
- 5 週目 (11/10) : 質問して答えるはできたけど来た答えに対してさらに深掘して質問するのやりアクションをとるのが難しかった。
- 9 週目 (12/1) 最初にやったグラマーが難しかった。先生が説明している時は理解しているのにいざ自分一人でやるとなると難しい。
- 12 週目 (12/22) : 最初 VOA 難しいと思っていただけで今最初の VOA をやると結構スラスラ答えられたので英語能力伸びたなと思いました。

学生 B は、1 週目で思ったことが英語にできないことを自覚し、スピーキングを伸ばすことを目標とした。4 週目には会話練習が上達に効くと実感できており、7 週目には英文を組み立てられるようになってきたと感じている。8 週目だけを見ると、一見「英文を組み立てられない」と感じたことが目立つが、これまでの回答からの流れで見ると、単語を並べることで意思疎通はできるようになった段階で、次は「きちんとした」文法的な英文で会話をすることを目標としたことが読みとれる。

〈学生 B〉

- 1 週目 (10/6) : 瞬時に思ったことを英語にすることは非常に難しいのだと改めて実感した。自分のスピーキング力を実感し、さらにスピーキング力を高めようと思った。
- 4 週目 (10/20) : ペアワークでは普段、英語で話すことが無いので非常に練習になった。また英語力が身についたと実感した。
- 7 週目 (11/17) : 徐々に、英語で話すことを頭の中で徐々立てて組み立てることできるようになっている実感がある。この調子で英語を身につけていきたい。
- 8 週目 (11/24) : 咄嗟に英語でしゃべろうとしても、英語を頭の中で組み立てることができず、単語でその場を乗り切ろうとしてしまう。単語だけでも恐らく、

相手には伝わるだろうが、きちんとした英語の会話を交わしたい。

学生Cは、出来事描写が具体的なのが特徴的である。2週目は教員のアドバイス、6週目はカメラオンでの会話の様子、10週目は知識へのアクセスが遅いという自覚症状について具体的に言語化できている。12週目は復習をかねて4週目の活動にプラスアルファした活動を行なったのだが、それについて4週目の時と比べて難しく感じなかったことから成長を自覚できたと報告している。このように並べて見渡すと、「英語が口から出てこない」症状についてのメタ認知が向上していることが分かる。この症状は、英語の知識不足、話題のストック不足または話題選択の遅さ、知識へのアクセスの遅さ（自動化・流暢性不足）などが主な要因である。初期の段階（2週目）から、話題選択の遅さ（準備しておくことである程度可能）を分けて考えることができているが、それ以外の要因については6週目の段階でも「表現につまる」というざっくりした捉え方にとどまっている。しかし、10週目には「言いたいことや伝えたいことを知っている英語の知識から素早く取り出して話すことができる」というように、自動化・流暢性不足の問題を的確に言語化できるようになった。

〈学生C〉

- 2週目（10/13）：実際に自己紹介をするときに何を言おうか迷ってしまうので先生が教えてくださったお決まりの持ちネタを考えておこうと思いました。
- 6週目（11/10）：カメラをオンにしてやってみました。最初はカメラに慣れないのでみんな手探り状態だったのですが徐々に慣れてきて様々な種類の質問と受け答えをすることができました。英語の表現に詰まりながらもできるだけ英語で伝えようとがんばっていてとても楽しかったです。
- 10週目（12/8）：グループワークの際にもっと理由などをつけながら答えたかったのですがいざ話すときに理由を英文で置き換えることができずに話せませんでした。言いたいことや伝えたいことを知っている英語の知識から素早く取り出して話すことができるようになりたいです。
- 12週目（12/22）：この授業の最初の方に〔4週目〕カードを見てそのシチュエーションを答えるというものを行った時は難しく感じたのですが今回改めてやった時はそこまで難しく感じなかったため成長できていると感じることができました。（略）

最後に紹介する学生Dは、様々な活動についての描写や質問が具体的で、その記述は教員による授業の振り返りに直接役立つことが多い。時々大学構内からの受講になるので、チャットでのグループワークについて検討するときの情報源でもある。できたことは嬉しい、できなかったことは次はこのように頑張る（あるいは教えて欲しい）、というパターンの振り返りであり、語学学習には最適だと言える。以下は、自宅から「マイクオン」で受講した回の振り返りの抜粋である（ポジティブな部分に下線をつけている）。

〈学生C〉

- 2週目 (10/13)：皆さん初めましてで最初は緊張しましたが、徐々に相手の返答に対してリアクションができるようになりました。何度も質問を聞き間違ってしまったのですが、少し雰囲気や和やかになって良かったです。もっと自分の頭に浮かんだ言葉を英語に変換できるようになりたいです。もっとリアクションの幅を広げたいと思います。(略)
- 4週目 (10/27)：(略) グループワークでは音声が乱れていたりしてうまく他の方々の声が聞き取りづらかったりしてスムーズに会話が続きませんでした。受け答えや返答+説明や付け加えの文がもっと上手に言えるように英語をもっと身につけたいです。質問側が、回答してもらった後のリアクションについて教わりたいです。(略)
- 5週目 (11/10)：今回顔出しにしてグループワークをしました。カメラオンにして本当に良かったです！相手の表情やしぐさが目に見えるし、話している間もみんなの反応とか、うっかり忘れた単語など教えてくれたり、とても良かったです。チャットやカメラオフだと発言しにくかったり、遠慮してしまったりするのがありますが、顔を出すことでタイミングのはかり方や皆の笑顔を見てもっと楽しめます。次回からもカメラオンにしてやりたいです。今までで一番時間を有意義に使えたグループワークでした。
- 9週目 (12/1)：同じものであってもその時の形状や場面、捉え方によって単数・複数形・原形など異なることがよく理解できました。(略) グループワークでは、質問文の中に Do と is がどっちもあるので答え方に戸惑いました。自分が主語かその対象物が主語かによってどちらの動詞を使うかの使い分けを意識しながら、どっちが主語であってもすらすら答えられるように練習したいです。
- 10週目 (12/8)：ビデオオンでのグループワークはとても楽しかったです！カフートは時間制限に焦ってしまいたくさん間違えてしまいましたが、瞬時にコレだ！ってわかった時は凄く嬉しかったです。(略) have been ~ing の問題では全問正解だったのがとても嬉しいです。状態が継続しているかどうかの見極めが重要なのかなと思いました。グループワークで次こそはリアクションをしたいと思います！
- 11週目 (12/15)：can と be able to の使い分けについて意味的な違いがあることを高校の時聞いた覚えがあったんですが、忘れてしまったので教えていただきたいです。クリスマスの音楽を聴いてもうそんな時期なのか～と季節を感じました。カフートで英文を読んで瞬時に和訳できるくらいの力を身につけたいです。短い英文からトライして練習します。○○のとき何しているのかについていろんな場合を当てはめてその質問と応答をスラスラ言えるようにもっと練習します。
- 12週目 (12/22) 今までで1番カフートでいい成績が取れたのが嬉しかったです。ランキングで2位に一瞬だけだけになることが出来て凄く嬉しかったです。look at と watch のニュアンスの違いについて曖昧だったので今回問題に出てきて良かったです。グループワークは最初の頃よりたくさん会話できるようになって嬉しいです。あと数回しかないのが本当に寂しいです。

このように、フォームでのリアクションペーパーは、教員にとって、毎回の「授業時観察」にかわる（あるいはそれを補う）情報源として、また個別の学生の学習状況・姿勢を把握するツールとして、非常に有用である。

5.3 まとめ：活動Eの改善

5節では、オンラインでの「授業・学習のサイクル」（2節）において、振り返り（学習活動E）が重要な役割を果たすことを見てきた。経験を「学び」に変えるのに、学習者がその経験を振り返るステップは不可欠であり、毎回の「課題」（の一部）として取り組むことで、この重要なステップが習慣づけられると期待できる。教員にとっては、授業時観察ができないだけに、学習活動がうまくサイクルになるよう授業を計画・調整するのに欠かせない情報源となる。

ただし、現在の実践方法では、図1でも表現しているように、個人の「振り返り」活動に対する「直接」のフィードバックは与えられない。「全体向け」のフィードバックは比較的直接的だが、あとは「振り返りを受けて調整した学習活動」という間接的な形になる。また、現時点では全ての「振り返り」を一覧できるのは教員だけであり、フィードバックはその時その時の投稿を見るしかない。Teamsをプラットフォームとする授業の枠組みにおいては、これが最適解かもしれないが、「全体向けフィードバック」の他に、自分の「振り返り」が個別のフィードバックとともに一覧できる形ができればと考えている⁽³⁷⁾。

また、現在の「リアクションペーパー」は、概ね「反省」は回避できているが、5.2で紹介したような、適切な対比、具体的な描写や質問、的確なメタ認知、適度な目標設定は、全員ができるようになったわけではない。「外国語の学び方を身につける」ことも目標としている以上、学生がより効果的な「振り返り」を行えるよう、指示文やフォーマットには改善の余地があると考えている。

6. Teamsでの授業実践

最後に、Teamsをプラットフォームとした時の「授業」の実際を概観しておく。まず、この授業での、典型的な授業内外の活動・時間配分（目安）・参加形態を表5に示す。上述のように、この授業設計では、教員が全体に向けてリアルタイムで指示・解説などを与える時間は合計で30-40分程度である（3節）。補足教材としてKahootを使う場合はこれに20分加算されるが、Google Formsのクイズの場合は、進捗をスプレッドシートで確認しつつ、授業計画の調整（当該授業の時間配分や翌週の内容調整など）を行う。Cの会話練習の時間は、グループを巡視したり、当該授業時のフィードバックを投稿にまとめたり、解説部分の録画をStreamに上げ、そのリンクをオンデマンド資料Teamsに載せるといった作業に充てる。学生の質問には随時、個別対応する。

次に、Teamsの利用についてまとめると、秋学期は、図15に示すように①「一般」チャ

(37) Google Formsはメールアドレス宛に、自分の回答と自動採点の結果、自動フィードバックが送られる。このメールを整理してもらえば、学生も全体を振り返ることは可能である。また、後から個別フィードバックを加えることも可能であり、それももちろん閲覧できる。

表 5 授業内外の活動・時間配分（目安）・参加形態

	活動	所要時間	参加形態
授業外	A：VOA 課題（Form） D：Duolingo 課題	20-60 分程度 50-100 分程度	（各自）動画視聴・クイズ （各自）100XP 分の学習
授業中	挨拶＋スモールトーク	5 分	（数名）教員と英会話
	前回のリアクションペーパー・ VOA 課題へのフィードバック	10 分	（一斉）教員の話聞く ※会話練習の準備も兼ねる
	B：歌でリスニング 音声特徴のポイント解説 発音デモ	5 分 10 分	（各自）聞いてノートにメモ （一斉）教員の解説を聞く （各自）発音練習
	補足教材で語彙・文法の復習 a. Kahoot b. Form クイズ （※ a, b のどちらかまたは両方）	20-30 分 ※両方でも 40 分まで	a. （一斉）クイズ参加 b. （各自）クイズで学習（※早く終わった人は C の準備か翌週までの課題に進む）
	C：会話練習・パターン練習	30-40 分 ⁽³⁸⁾	グループ／ペアワーク＋録画
	まとめ＋挨拶	5-10 分	課題確認・質問受付など
授業外	E：リアクションペーパー	3-5 分程度	（各自）Form で回答



図 15 Teams チャンネルの使い分け

ネル，②「グループ」用のチャンネル，③「フィードバック」チャンネルに分けて使った。

①「一般」チャンネルは，毎回の授業概要（教材や資料へのリンクを含む），授業時の「全体会議」，「課題」の通知，その他「お知らせ」の投稿に使う。「授業概要」は，通常は時

(38) 最初は活動の指示にも時間がかかり，グループに移動するところでもたつく。補足教材を使う学習を行う余裕は最初はほとんどない。



図 16 授業概要 (12/22)⁽³⁹⁾

間配分と教材や資料へのリンクだけである (図 16 参照)。

①デフォルトでは「課題」を設定すると「一般」チャンネル通知が来る。上述のように、この授業の自習 (活動 A, D, E) は全て Teams 外のツールであり、Microsoft Office とも連携していないため⁽⁴⁰⁾、Teams の「課題」機能は使う必要はない。しかし、Teams の「課題」機能を通すことで、「課題」一覧に表示され「一般」チャンネルに通知も来る。外部ツールを使うからこそ、ルーティンの課題は Teams の「課題」機能を使い、期限も含めてクラスチーム内で一覧できる方がいいと判断した⁽⁴¹⁾。なお、この授業ではルーティン課題が 3 種あるため「カテゴリ」を指定するタグも利用した (図 17)。

②「グループ」チャンネルでは、学生が会議を開き、ペア/グループワークを行う。ペアワークの場合は 1 つのチャンネルで最大 3 つの会議が開かれる⁽⁴²⁾。

③「フィードバック」チャンネルでは、「リアクションペーパー」と「VOA クイズの所感」の回答部分を、名前なしで全員分公開し、教員からのフィードバックも投稿する。原則、

(39) Teams の仕様で投稿が重なってしまうので、図 16 のように「詳細表示を忘れずに」という見出しを毎回つけている。春学期「資料がありません」という質問があり、「詳細表示」や「～件の返信」をクリックして、「見えない部分を広げて見よう」という行動に移らない学生がいることに気づいたが、当初はその都度個別対応していた。その後、慣れ不慣れに関わらず、そのタイプの学生は一定数いると判断し、毎回見出しをつけることにした。

(40) Microsoft Forms を選ばなかった理由については (注 16) を参照。

(41) 「課題」機能を使うと「成績」機能も使える。これもメリットではある。

(42) 1 つのチャンネルで複数の会議を開くと、迷子が出てくる場合がある。慣れれば問題ないが、特に初期は指示を徹底する必要がある。2020 年 12 月に新しく加わったブレイクアウトルーム機能も試したが、動作は安定していないところがある。便利なことは便利だが、語学はクラスサイズが小さいので、チャンネルごとにグループ会議を開かせるやり方でも支障はなく、安全ではある。

山内真理：「ニューノーマル」時代の外国語語教育



図 17 Teams「課題」：カテゴリ別表示

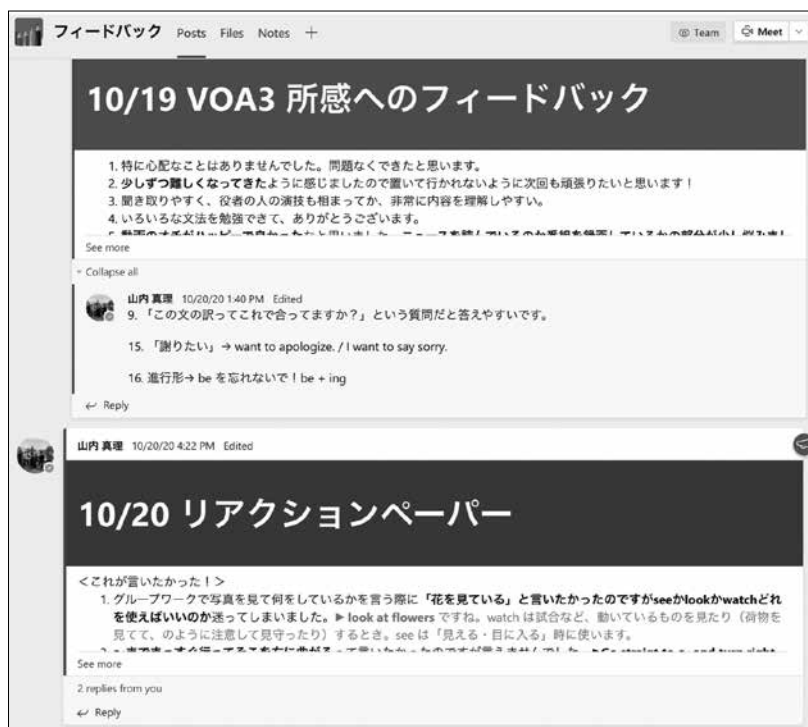


図 18 「フィードバック」チャンネル

図 18 のように VOA クイズの振り返りとリアクションペーパーでの振り返りを、それぞれ 1 つの投稿にまとめる形にしている。

ただし、教員からのフィードバックをどのように加えるかはまだ揺れている。20-30 件

の振り返りコメントに教員フィードバックをそのまま書き足すと、1件の投稿の最大文字数を超えてしまう。見やすさから言うと「返信」を使った方がいいかもしれない。いずれにせよ、この形のままだと、さかのぼって、あるいは特定のトピックについて、フィードバックを確認するのはやりにくい。「チャンネル」内検索が使いやすいよう、フィードバックのフォーマットを改良する必要がある。

以上、2節で説明した「授業・学習のサイクル」を Teams をプラットフォームとして実践した様子を概観した。Teams は LMS として設計されているわけではない分、どこで何を配信するのか工夫をする必要があり、今回の実践でも、特に全体フィードバックの与え方は「これが最善」とは言いにくい。今後も外部ツールと併用する形で Teams は利用するつもりであり、作業コストの点からもベターなやり方を検討していきたい。

7. おわりに

本稿では、2020年度秋学期開講の「基礎英語2」の実践を振り返った。2節で論じたように、この授業では「英語の音声処理・コミュニケーションのスキルと態度・外国語の学び方」の3つの側面に到達目標を設定している。この目標を達成するべく、メインの学習活動 A~E と、それをつなぐ教員の介入（指導・支援）がそれぞれに連動して「学習サイクル」を作るよう、時間配分や学習モードも考えて全体設計（図1）を行なった。事後調査の回答終了後、他の記録と合わせて詳細な分析をする必要はあるが、指導目標を達成するために設計した授業・学習のサイクルは、概ね意図通りに機能したと考えられる（2節）。

4節では、オンライン教材を活用する授業・学習サイクル（2節）を構成するオンラインでの学習活動を考察し、VOA クイズでの予習、授業時のリスニング、Duolingo アプリでの自習のそれぞれについて学習活動の目的と実施法を概観した。また、補足的に用いる教材として、Kahoot! クイズ、Google Forms のクイズ、Quizlet の学習セットを紹介した。いずれの活動についても、「英語力向上に役立った」との評価が多く、概ね意図通りに機能したと言える。これらの双方向教材作成ツール（Google Forms, Kahoot!, Quizlet）はいずれも複製・編集・共有（公開）が容易であり、個人用の教材準備だけでなく、教員間での共同教材開発の面でも期待できる。

5節で論じたように、オンラインでの「授業・学習のサイクル」（2節）において「振り返り」（活動 E）の役割は重要である。経験を「学び」に変えるのに、学習者がその経験を振り返るステップは不可欠であり、毎回の「課題」（の一部）として取り組むことで、この重要なステップが習慣づけられると期待できる。教員にとっては、授業時観察ができないだけに、学習活動がうまくサイクルになるよう授業を計画・調整するのに欠かせない情報源となる。ただし、今回の実践方法では、個人の「振り返り」活動に対する「直接」のフィードバックは与えられない（図1）など、改善の余地は大いにある。これは、プラットフォームとしての Teams 利用（6節）とも関わる検討事項である。

3節で論じたように、この授業・学習の設計は、フルオンライン環境を想定したものはあるが、他の授業方式にも十分適用できると考えている。今後も外部ツールと併用する形で Teams は利用するつもりであり（6節）、授業方式の如何に関わらず、指導と学習の目標に沿って授業の質を維持できるよう、作業コストも考慮しつつ、より良い実践方法を

引き続き検討してこうと考えている。

〔参考文献〕

- Bax, S. (2003). CALL-past, present and future. *System*, 31, 13-28.
- Bax, S. (2011). Normalisation revisited: The effective use of technology in language education. *International Journal of Computer-Assisted Language Learning and Teaching*, 1(2), 1-15.
- Greer, T. & Yamauchi, M. (2008) Pronunciation tasks for academic study skills. In K. Bradford-Watts (Ed.) *JALT2007 Conference Proceedings*, pp.553-561.
- 井上順子・浅野智 (2009) '体験' を '学び' に変える手法としてのリフレクション：'行為' の中での省察' への着目. 日本デザイン学会第 56 回研究発表大会「日本デザイン学会研究発表大会概要集」
- 石川慎一郎 (2016) 日本人学習者の L2 英語の発話量：母語話者及びアジア圏学習者との比較. *日英言語文化研究*, 15-26.
- Ishikawa, S. (2015) Learners' performance in L2 receptive skills tests and their speech fluency: A comparative study of Asian learners of English with different L1 backgrounds. 全国英語教育学会第 41 回熊本大会 (8 月 23 日, 熊本学園大学) 発表資料.
- Kolb, D.A. (2015) *Experiential Learning: Experience as The Source of Learning and Development*. 2nd Ed. Pearson Education.
- 小森清久 (2010) 2010 年度センター試験リスニングテストの分析と対策. *G.C.D 英語通信*, 47, 16-17.
- 松村明 (監) デジタル大辞泉. 小学館.
- 大木俊英 (2012) ESL/EFL リスニングにおける発話速度の役割『ことばの時間制御機構』に基づいた再考. *白鷗大学教育学部論集*, 6(1), 91-112.
- Tauroza, S., & Allison, D. (1990). Speech rates in British English. *Applied Linguistics*, 11, 90-105.
- 山内真理 (2002) 日本人学習者の英語音認識における弱点. *大阪薬科大学教養論叢・ぱいでいあ*, 26, 93-114.
- 山内真理 (2017) 【特集】学習への動機づけと ICT 利用教育：Kahoot! による学生参加の促進—ゲーム要素による学習態度の変容—. *コンピュータ&エデュケーション*, 43, 18-23.
- 山内真理 (2019) 非同期型動画交換を軸としたクラス間異文化交流：より良い活動設計を目指して. *千葉商大紀要*, 57(2), 59-84.
- 山内真理 (2020a) Active Learning in the Japanese EFL Classroom (日本の EFL クラスにおけるアクティブ・ラーニング). *千葉商大紀要*, 57(3), 71-94.
- 山内真理 (2020b) 【特集】CUC のオンライン授業：Teams の教育利用—試行錯誤の春学期を振り返る—. *CUC View & Vision*, 50, 24-33.

(2021.1.20 受稿, 2021.3.4 受理)

〔抄 録〕

新型コロナウイルス感染症がどうなるのか、先が読めない状況が続いており、100%「対面」の授業が可能になったとしても、授業のやり方が以前の「常態」に戻ることはないだろう。今後しばらくの間は、授業方式の切り替えにも対応することが必要になっている。

本稿では、100%「遠隔」環境を想定した授業設計が、他の授業方式にも適用できるかどうかとも検討しながら(3節)、2020年度秋学期開講の「基礎英語2」の実践を振り返る。まず、指導・学習の目標と、それを達成するために設計したメインの学習活動および教員の介入(指導・支援)を連動させる「学習サイクル」を概観する。さらに分析する必要があるが、指導目標を達成するために設計した授業・学習のサイクルは、概ね意図通りに機能したと考えられる(2節)。この授業・学習サイクルを構成する個々のオンラインでの学習活動についても、学生からの評価等に基づき、概ね意図通りに機能したと評価している(4節)。そのサイクルで重要な役割をはたす「振り返り」について、学習者にとって不可欠な活動であるだけでなく、教員にとっても授業時観察の代用、あるいは補強として、授業を計画・調整するのに欠かせない情報源であることを論じる(5節)。ただし、フォーマットや実施方式に改善の余地もある。最後に、この設計に基づいた授業・学習のサイクルの実践において、Teamsをどのように利用したのかを概観する(6節)。